戸塚区教育研究会

1　研究主題

『社会に開かれた教育課程の創造・実践』

　～主体的・対話的で深い学びを実現する授業力の向上と研究交流の広がりをめざして～

2　研究主題について

　新学習指導要領の全面実施に合わせ、市小学校教育研究会が設定しているものと同義のものを区の研究主題として設定している。現行の指導要領に改訂される際の基本方針に示されているように、「これからの未来・社会を切り拓くための資質能力を身に付け、生涯にわたって能動的に学び続ける子ども」を育てたい。そのために、教員側は日々の授業を大切にしながら、その改善に粘り強く取り組みたいと考える。

　また、授業改善を行うことは必要であるが、個人で取り組むには限界がある。戸塚区は２６校と学校数が多いが、それを最大の強みと考え、各校の実践に基づいた積極的な研究交流を目指したい。

　以上のことから、研究主題を上述のように設定した。

3　研究方法

・可能な範囲で集合研修を行うことでの研究交流の深まり

・Zoom、Google Meet 等を活用したオンライン開催（ハイブリッド開催含む）の推進

・コロナ禍における授業のあり方、授業形態等を学ぶ機会（時間）の確保

※今年度も新型コロナ感染症の影響が色濃く残る中ではあったが、上述の工夫・手だてを講じながら「学びを止めない」ため、研究に取り組んだ。

4　年間活動（事業）報告

　５月　第１回 戸塚区小学校教育研究会 総会（書面総会）

１１月　区巡回書写展・巡回図画工作展

　３月　第２回 戸塚区小学校教育研究会 総会（書面総会）

※この他にも、講演会や実技研修会、学習会などを各教科等研究会で実施してきた。

5 研究の成果と課題

３の項でも述べたように「学びを止めない」をキーワードの一つとして、「コロナ禍でもできること」を考えながら日々の授業実践に取り組んできた。また、どの学校においても、いかに「学びの質」を落とさないかが大切にされていた。こうした視点を戸塚区全体で共有し、各校・各研究部での取り組みを推進することができたと考える。様々な制限がある中でも、各校・各研究部が創意工夫を凝らし、研究方法の見直しや新しい取組の推進ができたことこそ、戸塚区としての最大の成果と考える。また、招請状の作成・発送についてもデジタル化を継続していくなど、昨年度までの振り返りを生かした取組をさらに推し進めることができた。

一方で、オンライン化が進むに伴っての課題も出てきている。今年度は、区小教研総会はすべて書面総会となった。情報発信や共有はオンラインでも可能ではあるが、実際に人と人とが対面して話すことにはなかなか及ばない。正確に情報が伝わりきれていないといった事態も起こっていた。顔を合わせて話すことで交流が深まり、情報交換も活発になるなどの好循環が生まれ、教職員の学びの質が上がっていく。授業研究会にあっては、子どもたちの姿や教室の雰囲気、教師の手立てなどについては、映像を通して見る場合とリアルタイムで参観する場合とでは印象が大きく変わることもあるだろう。改めてオンライン化のメリットは生かしつつ、リアルな教職員同士のコミュニケーションも大切にしていきたいと考える。

令和４年度の研究活動については不透明な部分が多い。現状から考えると、急速に事態が収束に向かうとは考え難い。しかし、これまでの成果と課題を踏まえながら、引き続き一人でも多くの教職員が研究に“直に”携わっていけるようにしたい。そのために、研究会の開催方式をハイブリッド化することなどを継続していけるとよいと考える。また ICT 活用という視点では、教職員間の個人差が大きいことも事実といえる。区が一体となり、タブレット端末をはじめとした ICT 機器の有効な活用法の共有や、ICT 環境の整備をさらに推進できればよいと考える。「働き方改革」という視点から見ても、こうした取組は意義深いだろう。

新型コロナ感染症の影響で様々な制限が加えられるなど、教育の世界も苦境に立たされていると言える。しかし、**“Adversity is the best school.”**（「逆境は一番の学校」＝「逆境の中でこそ人は成長する」）という言葉のように、この難しい時代だからこそ多くの学びを積み重ねることができ、私たち教職員も成長できたと考える。「コロナ禍」を言い訳にすることなく、「『今』だからこそできたこと」「『今』だから見直しを図れたこと」も多くあるだろう。そうした今年度まで連綿と繋がれてきた学びを、間もなく始まる新しい研究体制へと確実に引き継ぎ、戸塚区としての新たな一歩を踏み出せるようにしたい。